

## 歎異抄 第十章

一 念仏には無義をもつて義とす。不可称不可説不可思議のゆゑにと仰せ候ひき。そもそも、かの御在生のむかし、おなじくころざしをして、あゆみを遠遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を当来の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひとびとにもなひて念仏申さるる老若、そのかずをしらずおはしますなかに、上人（親鸞）の仰せにあらざる異義どもを、近来はおほく仰せられあうて候ふよし、伝へうけたまはる。いはれなき条々の子細のこと。

念仏というものは、分別、悟性でもって理解し得ないところが、その正しい理解です。なぜなら、念仏というものは行者のはらいではなく、阿弥陀仏によつて与えられるものであり、そしてこの阿弥陀仏のはからいは、口でいうこともできず、言葉で説明することもできず、ただただ不思議きわまるものでありますから、念仏は人間のこざかしい理性でもって理解できません、と親鸞聖人がおっしゃいました。

よくよく考えてみますと、かの親鸞聖人がご存命だった昔、篤い信心の心をもつてはるばると遠い京洛の地へ足を運び、親鸞聖人の教えを親しくお聞きし、信心を一つにして、希望の心を未来に行くべき真の極楽浄土につないだ人々は、わたしと同時ににつきりと親鸞聖人の教えの趣旨をお聞きしました。が、その人たちに従つて念仏を申されている人々は、老いも若きも大変大勢いらつしゃいますが、その中にはかの聖人の仰せでない、異なった考えを仰つておられる人も、近頃は多くいらつしゃるとか、人づつてに承つたので、それでわたしはその異説が正しくない理由を次々と申し上げる次第であります。

【無義】思い計れないこと。つまり人間の判断を超越していること。

【義】他力の本当の意味。正しい理解。

【不可称】口ではめあげることのできないこと。称はほめる、いいたてる、となえるの意。

【不可説】ことばで説明することのできないこと。

【不可思議】心で思い計ることのできないこと。  
【おほせさふらひき】親鸞聖人が唯円に仰せられたこと。

【御在生のむかし】親鸞聖人がご存命の頃のこと。

【遠遠の洛陽】はるかに遠い京都。

【当来の報土】将来、間違ひなく生まれる極楽浄土。

【御意趣】ご趣旨。親鸞聖人の考えを指す

【子細のこと】詳しい事情。いわれ。

以上